

ホテルのニュースレター

日本ホテルの会 2010/6 第50号

追悼特集

「日高敏隆先生を偲んで」

日本ホテルの会会長

本多和彦

昨年 11 月、日本ホテルの会初代会長であり、動物行動学の第一人者である日高敏隆先生が逝去されました。日本ホテルの会では、日高先生を偲ぶとともにいただきました数多くのご指導に感謝するため、先生縁の方々にご寄稿いただき、追悼号を発行いたしました。先生の暖かい人柄、自然や動物に対する愛情、そして厳しい科学者の心を今一度お感じいただけたら幸いに存じます。

日高先生は、1930 年 2 月 東京市に生まれ、1952 年東京大学理学部動物科を卒業されました。東京農工大学教授を経て、1975 年に京都大学教授に就任し、1982 年からは同大理学部長を務められました。1993 年京都大学退官後、1995 年に滋賀県立大学学長に就任されました。その後、総合地球環境学研究所所長、京都精華大学客員教授を歴任されました。専攻は動物行動学です。

日本ホテルの会では、1992 年の発足から 1998 年まで 7 年間初代会長として会を引っ張っていただきました。この時期の日本ホテルの会は、「ホテルを象徴としつつ身近な自然の大切さを考える」という理念を広く伝えるため、会の組織の充実や調査活動などを積極的に行っていました。こうした活動は、日高会長を筆頭に佐々理事長、矢島副会長、大場理事などの力によって支えられていたと思います。特に日高会長の多方面にわたる親交、いわゆる顔の広さで、いろいろな方が当会のシンポジウムで貴重な話をしてくださいました。あの頃は、日本ホテルの会の黄金期であり、それを支えていたのが日高会長であったと思います。

思い起こしますと、日高先生に初めてお目にかかったのは、いつどこであったか良く覚えていません。おそらく日本ホテルの会を立ち上げることになって、事務的な打ち合わせの場であったと思います。どこで、どのような話をしたのかは覚えていないのに、はじめてお会いした印象は、強く心に残っています。浅学の上、化学が専門の私は、日本ホテルの会でお目にかかるまで、日高先生を存知上げませんでした。会う前は動物行動学の大家ということで、どんな人か、気難しい人か不安でしたが、お会いしてみると気さくで偉ぶるところの全くない、誰のどんな話でも真剣に耳を傾けてくれるすばらしい方でした。

人懐こい笑顔が素敵なおじさんというのが第一印象で、当時まだ若かった私は、先生の軽妙な語り口でいろいろ教えていただいたことを思い出します。

日本ホテルの会について、日高会長は、「自分の考えを伝えるために作ったんだよ」とおっしゃるかもしれません。確かにそういったこともあったろうと思います。しかし、私には、当時のわれわれに「君らが一生懸命にやるなら一肌脱ぐよ」と言っていたように思えます。日本ホテルの会は、発足以来 18 年目を迎えますが、日高先生が理想とするところにまだまだ到達していません。いつの日か、先生のあの笑顔と飄々とした語り口で「いい会になったね、僕はこうゆうのをやりたかったんだよ」おっしゃっていただけるように努力していかなければならないと思います。

先生とお話できなくなったことは大変に残念でなりません。でも、ご本人は「人が死ぬのも自然の道理だから仕方ないよ」と他人事のようにおっしゃっているように思います。

日高先生の大いなる業績に敬意を表しつつ、温かいご指導に感謝申し上げ、ご冥福をお祈りします。

(ほんだ かずひこ)

「日高敏隆さんを偲んで」

日本ホテルの会名誉会長 矢島 稔

日高さんの訃報を知ったのは昨年（2009 年）11 月 24 日の朝日新聞で、2 段組みで写真入りの記事であったが、亡くなったのは 11 月 14 日とあり、既に 10 日経っていた。

私はすぐに奥さんに電話をした。「ええ、入退院をくりかえしていたのに肺がんが悪くなったのだけれど、お酒とたばこは最後までやめず、産まれて間もない孫の顔を見て喜んでいたわ。その新聞記事はまだ私も見ていないから FAX で送ってこない」という事だった。

彼ほどの有名人の訃報が 10 日過ぎてから出たのは不思議という他ない。それ程急に亡くなるとは、誰も予想できなかったのだろう。その時奥さんから聞いた話で日高さんらしいと思ったのは、亡くなる 2 日位前、突然原稿用紙とペンをもってくるようにいわれたので、あわてて家からもつてくると、もうペンをうまくにぎれないようなのに話がとまらず「ボクは今、ギリシャのアリストテレスの偉大さにおどろいているよ。彼は最初に系統樹を描いたが、根元が大きく 2 つに分かれ、一方が動物になり、もう一方が植物になったという事を主張した。今ボクは死に近づいているが、私の体の一部が次第に植物に変わり、それが枯れつつあるという実感を得ている。つまり動物として死ぬというより、植物になって枯れていくという方が正しいと思う。それを

書きたいのだが……」といいながら、とうとうペンをにぎれなかったといい、それが最後の言葉になったそうだ。

彼の頭にはユーグレナの泳ぐ姿が見え、動植物は本来一つの根から分かれたものという思いがこみ上げていたのかも知れない。

水中を泳ぐ葉緑体をもつ原生動物が、死の直前に日高さんの頭の中をめぐり、それを主張したアリストテレスに思いを寄せていたのは、日高さんらしい良い話だと思った。

ところで日高さんと私がいつ出会ったのかを思い出そうとしても、はっきりしない。つまり



多摩動物公園昆虫生態園オープン記念日（'88年4月16日）
正門前にて。右が日高氏。左が筆者。

劇的な出来事があったわけではなく、学会で互いに顔を覚えている関係で、内分泌の研究室の竹脇先生の弟子の一人だと思っていた。

当時私は、開園間もない多摩動物公園の初代園長であった林寿郎さんにバッタの大量飼育法の開発をたのまれ、ひそかに動物公園に通っていた。昭和30年代は、農薬と殺虫剤の開発にこの業界は競い合って、今想えばとりかえしのつかないような自然破壊の成分も使われ、特に水田では水生昆虫が壊滅的な打撃を受けていた。ホタルやゲンゴロウ、タガメ等がまたたく間に姿を消し、水田のイナゴ類がめっきり少なくなった。私も知らなかったのだが、この影響で困ったのが動物園であった。動物園では毎年大量のイナゴ（乾した）を購入していた。理由は猿や鳥、わけてもひなに餌として必ず与えていた。ところがこういう業者が廃業せざるを得なくなる程いなくなり、代替りの人工餌料を与えても、鳥のひなは殆どくる病になって足が曲がってしまった。

せっかく孵化させた丹頂のひなが立てないでは困る。そこで動物園では独自にバッタの生産体制を創ろうと考えたわけである。

たまたま林園長の東大理学部先輩に、古川晴男教授がいて、その弟子が私という関係で、以前から動物園のアドバイザーという立場に高島春雄さんがいたので、林さんが相談すると、良いですねという推薦を受けて私をたずねてきたというわけである。一期一会とはこういう偶然の結果、可能になる場合もあるという一つの例のように思う。

話はそれだが、これが日本最初の生きた昆虫を飼育展示する「昆虫園」の原点になる。

明けても暮れてもバッタとにらめっこをしていろいろ試み、やっと量産の方法をみつけた頃、たまたま日高さんに会ってバッタの話をしている内に、古川さんの事になった。

その何年か前、昆虫学会で古川さんが座長の八木誠政先生にピアノを出して欲しいとたのみ、鳴く虫の音の話をしたが、若い研究者から罵声を浴びているのを弟子としてどうしようもない苦い経験をしていた事があった。

日高さんは「大体天才はとんでもない事を平然とやるが、ひらめきには先見性があって、古川さんはその種の人ですよ。私には分かるな」と云ってくれたのをきっかけに仲良くなった。偶然にも、当時私は小金井市の貫井に住んでいて、農工大から歩いて 10 分位の所であった。当時一人暮らしをしていた日高さんがしばしば家に来て、いっしょに飲み、夕食を共にするつきあいが始まったのはごく自然のなりゆきであった。

やがて奥さんといっしょに来られ、家族ぐるみのつきあいが始まった。略歴を見ると当時農工大の講師で、1965 年に教授になっているし、私は 1964 年に「インセクトarium」を創刊しているので、初めから編集委員をたのんで、しばしば会うコンビになった。

この数年の間で忘れられないのは日高さんの食性で、激辛が何より好きでキムチだけあればつまみはいらなかった。これにはどうしても勝てなかったし、敬服する他なかった。

1975 年に京都に移り、より多彩な人生を送るようになったが、時々日高さんや奥さんと連絡をとり、打ち解けた交際を続けていた。

1988 年 4 月 16 日、昆虫生態園が開園、30 周年記念に公開された。私がバッタの量産を依頼されてから 28 年目で、日高夫妻と個人的につきあい始めたのもほぼ同じ位だった。

その日、招待状を出した日高さんはかけつけてくれ、インセクトarium (25 巻 6 号 p.4) に祝辞を寄せてくれた。要旨は次の通りである。

「昆虫園の一隅にチョウの温室ができたのはもう 20 年も前のことになる。その頃矢島さんはホタルの飼育に夢中になっていた。まさに生態系を再現した画期的な方法で成功したのも、もう昔語りになった。次はチョウであった。これにはまたべつの苦労があった。正月にチョウを飛ばすには光周性をコントロールして幼虫を飼わねばならない。けれど長日で飼いつづけると、何代かすると生殖力が落ちるらしい。

今は亡き本藤さんを中心に休みない努力が続いた。うまくチョウが飛ぶような試行錯誤が続けられ、それがうまくいくと体長 0.5 ミリの小さなタマゴバチが発生した。

そんな中でナガサキアゲハのギナンドロモルフ（雌雄かん合体）が羽化し、矢島さんと 2 人で解剖したが、どっちが執刀したかは憶えていない。

オープン式典の間、こんな事を考えていたばくは、新しい昆虫生態園に入った時、ただ感激の一語であった。……あの努力と経験があってこそ今この成功があるのだという事は、自分でもすぐ理解できた。」と。

その後、定年退職して東京動物園協会の理事をしていた私の所に、日本ホタルの会の発起人の大場さん達が来て、この会の規定や発表会のあり方などを検討し、日高さんを会長に、佐々学先生を理事長にお願いして発足したのが、1992年4月であった。

入会案内には経団連で行われた第1回のシンポジウムの写真が出ていて、日高会長は身近な人里を再生する必要性を説き、ホタルは人里の象徴であり、単に清流を再生するだけでなく、ささやかながら豊かな人里をつくるべきだというメッセージをかかげた。

この時は、未だ「里山」という単語が一般的になる前だった事が分かる。

私が最後に日高さんと話をしたのは亡くなる年の1月末、年賀状をいつも整理するが、長い間交わしている日高さんの賀状がないのに気づいたので電話した。元気な声で「やあ、申し訳ないが今年からやめる事にした」というので、「沢山の人に出すのだろうから分かった。でも元気な声が聞けてよかった」といって切った。その2日後、印刷された賀状が送られてきた。そうか忘れていたのに、とっさにやめたと云うのはさすがだなあと苦笑した。

日本ホタルの会も発会以来、いろいろな事があって事務局の人も変わり、日高さんが東京にいられない事もあって指名されて会長になった私も、群馬の開園の雑事のために本多さんに会長をお願いして、もう数年になった。

ただホームページやメールの交換などツールの進歩はスピードを速めている。

創立当初には考えられない社会背景の変化だが、この会の設立主旨はこれまで以上に重要性を増していると思う。

もうどこへ行っても日高さんに会えないのは淋しい。しかし会員の地味なパワーが里山にホタルをよびもどす事をきっと望んでいるに違いない。私もまだ現役でそれにトライしているので、亡き初代会長をしのびながらこの目的のために努力しようではありませんか。

会員全員でご冥福をお祈りしましょう。

(やじま みのる)



動物行動学の面白さを多くの人に教えてくれた「チョウはなぜ飛ぶか」をはじめ多くの名著を執筆されてきた日高先生。「ソロモンの指輪」をはじめ多くの訳本も出版されています。そのひとつ「生物から見た世界」は、ユクスキュルの思想に同感された先生の訳本。《いかなる主体にとっての環世界なのか》、ホタルを通して身近な自然を守る私達が是非読んでみたい一冊です。



「日高敏隆先生と日本ホテルの会」

大場螢研究所 / 横須賀市自然・人文博物館研究員 **大場 信義**

日高敏隆先生と日本ホテルの会を記す前に、私と日高先生の関わりを記す必要がある。

私と日高先生との最初の出会いは約 30 年前にさかのぼる。

1980 年に高知大学で開催された昆虫学会において「昆虫のコミュニケーション」という公開シンポジウムが企画された。その際に当時京都大学の日高先生より私にシンポジウムの講演を依頼された。その翌年に北海道で開催された動物学会でのシンポジウムで再び講演依頼を受けた。そうした過程のなかで、先生から「これまでの研究成果を学位論文にまとめてみては」という勧めがあった。こうして、私ははからずも 1983 年に京都大学から「日本産ホタルのコミュニケーション・システムの研究」という研究成果に対して理学博士の学位を授与された。

当時、博物館は研究を遂行する上で、研究機材などを用意することは困難な状況にあったが、研究を進展させるには発光シグナルの録画・解析装置などの機器類がどうしても必要であった。こうしたなかで 1983 年から 3 年間にわたり、文部省特定研究「生物の適応戦略と社会構造」の第 5 斑の分担研究者として日高先生が私を参画させてくださった。この研究を契機とし、以前から構想していた独自の発光録画・解析装置を構築することができ、その後の研究を飛躍的に進展させることができたのは日高先生のお蔭と感謝している。この私の研究成果は日高先生をはじめとした他の研究者らの成果出版物のシリーズの一冊として『ホタルのコミュニケーション』(大場信義 1986 年、東海大学出版会)が出版された。

こうしたホタルの研究の経過のなかで、私は関係行政機関や企業へホタルが棲むような身近な自然の重要性を伝え、保護・再生を推進することが急務であると考えていた。この目的を達成するため日高先生にご相談したところ、大きなご関心とご理解を示され、国や市町村、企業などとのパイプ役となる活動を行う「日本ホタルの会」発足の契機となった。こうしたいきさつから設立発起人の一人であった私は、日高先生に会長をお願いしたところ、非常に多忙をきわめておられたにもかかわらずご快諾をいただいた。そして「ホタルを通して身近な自然を考える」というスローガンのもとに 1992 年に第 1 回シンポジウムと研修会を開催、以後毎年実施し、所期の目標が達成されていった。

以上のとおり日本ホテルの会は私のホテル研究を暖かく見守り続けてこられた日高先生なくしてはならない会である。

ここに改めて目高先生に深謝するとともに、ご冥福を心からお祈り申し上げる。

(おおば のぶよし)

「日高敏隆先生と日本ホタルの会」

日本ホタルの会事務局

日本ホタルの会は、1992 年 4 月に任意団体としてスタートし、同年 10 月に第 1 回の「ホタルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウムを、経団連ホールにて開催しました。日高先生は、1992 年 4 月から 1998 年 12 月まで初代会長を勤められ、シンポジウムではあいさつと基調講演を行なって頂きました。その中で日高先生は、日本ホタルの会の活動を次のように述べられていたように思います。すなわち、“何が何でも開発反対”とか“全く手付かずの自然を保護する”ということではなく、“自然と人間が自然に何か働きかけてせめぎ合っている接点みたいなところ（人里）を、どう保全し創っていくのか”と。



写真提供は大場信義氏

事務局保管の資料の「人里へのニュースレター」創刊号（1994 年 1 月発行）から、日高先生の記事を再掲載させて頂き、哀悼の意を表したいと思います。

日本ホタルの会の目指すもの

－「人里へのニュースレター」発刊に際して－

日本ホタルの会会長／京都大学名誉教授 日高敏隆

子どものころから昆虫が好きで、したがって草や木も好きだったぼくにとって、それまで親しんできた自然の小さな一区画が、何かの理由で失われてしまうのを見ると、いつもとても悲しい気持ちになる。

昔は小さな一区画が失われるだけだった。しかしその後、経済が進み、技術が進み、人間の近代主義的欲望がふくらんでくるにつれて、自然が失われるスピードも規模も急速に増大した。近頃さかんに言われるとおり、自然の破壊は全地球的規模のものとなった。ぼくも当然、“自然を守れ、開発はするな”と叫びたい気持ちである。

だがそこで、ぼくはずっと考えこんでしまった。“自然を守れ”と叫んで闘っていけば、自然は本当に守れるのか？開発反対とはいいたいのが、ぼく自身、便利な道路を早く作れという請願運動があったら、たちまちそれに署名する気持ちになるのではなからうか？そもそも、われわれにとって、“自然”とはいったい何なのだ？アマゾンの熱帯林は自然だが、道ばたの草や小さなチョウは自然ではないのか？

“技術が提出した（環境破壊という）問題に、技術が答えることはできない”と行っている人がある（リビングストン『破壊の伝統』講談社学術文庫）。これはぼくにはショックだった。けれどもほんとうにそうなのか？

そもそも守ろうとしているものが守りきれたためしはない。昔から城はいつかは必ず落とされたし、各地の伝統文化もほとんどすべて風前の灯である。多くの人々が守ろうとしたあちこちの自然も、結局守れなかった。

考え方を変えねばならないと、ぼくは思った。守るのではなく創る必要がある。では何を創るのか？そして、だれがどうやって創るのだ？

その当面の結論が“人里を創ろう”という日本ホタルの会である。

この会が働いていく中で、きっといろいろな問題がでてくるだろう。事は考えるほど単純ではない。それもよくわかっている。しかし今、われわれは、これまでわれわれが忘れていた大切なことに気がつきはじめたような気がする。その大切なことというのは、信じ込むことではなく、たえず模索をつづけてゆくことだ。

出典：人里へのニュースレター No. 1: 1-2 (1994)

観察会報告

INFORMATION

事務局からの お知らせ

2010年7月3日静岡県富士宮市にて日本ホタルの会観察会を実施しました。
今回は初めての試みとしまして一泊二日の行程を組み、ゲンジボタルとヒメボタルの観察を予定しました。天候はあいにくの雨でしたが、西沢川では多くのゲンジボタル、多種の陸生ボタルが観察できました。観察会には14人の参加者に加え、地元で農業体験をしている子どもたちも加わって大盛況でした。一方、ヒメボタルは観察時間帯に豪雨となり、発光を確認できませんでした。次年以降も、新たなことにチャレンジしていきたいと思います。

理事会報告

- ・2010年1月9日に理事会を開催し、新役員体制、会則の改正、談話会の実施、観察会の実施案、ニュースレター制作体制について協議しました。
- ・2010年3月13日談話会に先立って理事会を開催し、新役員の選任、観察会詳細検討、シンポジウム実施案について協議しました。
- ・2010年5月9日に理事会を開催し、故日高会長の追悼号の発行、観察会詳細日程案、シンポジウム開催時期について協議しました。

ホタルのニュースレター（第50号）

2010年6月25日発行



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

〒197-0011 東京都福生市福生487（日本ホタルの会事務局）

TEL&FAX：042-530-2111

e-mail：inoue@nihon-hotaru.com URL：http://www.nihon-hotaru.com

印刷 文明堂印刷株式会社 〒239-0821 神奈川県横須賀市1-3-12

TEL：046-841-0074 FAX：046-841-0071